

■ セッション1:ALOS-3について

- ・後方視分解能:2.5m, 1.25m, 0.8mを検討中. ロケット搭載性の観点で1.25mがキー
- ・降交点通過時刻:
 - ISCCPを用いた解析から国内については10:30/13:30被雲率に優位な差はない. 海外については気候帯毎に特性が異なる(熱帯地域:年間通して午後の被雲率は高い)
- > 継続検討
 - より高解像度データや気象関係論文, 地形効果, アーカイブデータを含めた多面的な検討

■ セッション2:現業への活用2(農業, 森林, 環境)

- ・立木率を算出するにはどのくらいの分解能が必要か?:1mから50cm程度あれば樹種分類
- ・精密オルソ:高精度DEM/DSMが必要
 - PRISM/DSMの精度:水平2.5m, 高さ5m程度
- ・ALOS-3:2機体制, ALOSと同一軌道, ALOS日本占有運用(海上からのポインティング観測)要望
- ・農業行政に使うためには年7-12回程度, 国内観測頻度がほしい
- ・中間赤外バンド:水が濁っていると近赤外では難しい
- ・観測頻度が重要 > 全球観測との兼ね合い
- ・農家や農業行政などパワーユーザとしてサポータに取り込める

■ セッション3: 新たな利用(研究, 利用)

- ・生物多様性および与える影響は衛星観測可能
- ・地域社会には衛星を有効に利用できる課題が多い
- ・高解像度, 50km観測幅, 立体視機能(直下・後方), データ価格の低廉(ライセンス)
 - データユーザの爆発的な増加が望める
- ・用語の理解とパラメータの定義, プロダクトレベル・センサーによって仕様が異なる
- ・提供画像フォーマット: BMP, TIFF, JPEG, パラメータ: テキスト, XML, GeoTIFF with RPC
- ・データ配信: 利用者の用途に合わせたサービス
- ・ALOS-2,3: 防災もミッションの一つ
 - TIRは搭載しないのか?: ALOS-2で発表するが小型赤外センサは検討中
- ・クラウドコンピューティングの今後?
 - 災害等緊急時に使うための環境として整備するのがよいと考えられる
 - 地上: コンピュータよりもネットワーク回線がボトルネックになるのではないか
- ・ハイパーによる土地被覆分類の精度は?
 - 基本的には精度は上がるが, 分光特性に違いがなければ難しい
 - 分解能が粗くなると精度は悪くなる. 日影は難しい
- ・ハイパーのバンドアサインの有効性?
 - 使い勝手のよいバンドに特化し, リソースを分解能に回してはどうか
 - 目的・対象によって異なる. 多用途に使える実証的なセンサの位置付け

■ セッション4: 現業への活用1(地図作成, GIS, 災害)

- ・実体視: 3方向視あれば雲の影響を小さくできる. ステレオペアで解像度は同じ(高い)がよい
- ・次世代災害監視衛星:
 - 広範囲(50km四方), 高分解能(1m-50cm), 高頻度, ステレオ撮影(直下・後方, 3方向視がベター)
- ・将来の光学衛星への期待: 観測幅PRISM相当, 分解能50cm, オルソ補正(位置精度1画素), 立体視, Pan/Multi同時観測
- ・広域的な斜面崩壊把握には2.5m分解能でも有用, 3方向視があれば雲の影響を小さくできる
- ・ALOS-3への期待
 - 計画観測, 高幾何精度, 低価格, 高観測幅, パンシャープン
 - 画質の向上, Pan/Multi同時・ステレオ視観測
 - フォーマット継承, 長期観測計画の事前公表, センサモデル開示

ALOS-3:高分解能光学＋ハイパー

分解能:光学1m程度以下(サブメートル)、マルチ:3m

立体視:必要(判読に有効)

幾何精度:1ピクセル

観測幅:50km 以上

感度:広いダイナミックレンジ

頻度:対象毎に依存。農業は、一年に数回晴れた画像。不法投棄も複数回必要。即時観測(初動対応、平均で2日遅れ、事後の綿密な観測)

観測対象物:農業(水稻)からは10aを単位とする(分解能ではなくて解析結果が)。森林(林分構造)状況、環境、生物多様性、災害(被災地、活断層、5年マップ)、地図作成、土砂災害、活断層、斜面崩壊

その他の希望:複数衛星、日本を細かく見ること、データフォーマット(2種類)、熱バンド、データ配信速度

午前の軌道か、午後の軌道か？

(会場内アンケートでは:午前希望者95%:午後希望者5%)

雲量の評価:今後も継続

観測対象毎に観測時期、場所、頻度を明確にする必要性。

ALOS-3 WS:2010/3/25

発表者: 17件 (ALOS-3)

参加登録人数: 112 (3 / 25)